

【安藤昌益研究の最前線（その5）】

安藤昌益の真営道医学を継承した
江戸の町医・川村真斎による処方収集書『真斎聚方』
における稿本『自然真営道』の処方群と、『真斎謾筆』
および『良中先生自然真営道方』の処方群との
「原文」による比較と考察から見えること
——『真斎謾筆』は、稿本『自然真営道』の処方群を
最も正確に、最も詳細に伝承しているということ。

和田耕作

（KOSAKU WADA）

I はじめに

安藤昌益の真営道医学を継承した江戸の町医・川村真斎（1785－1852）による処方収集書『真斎聚方』（内藤記念くすり博物館蔵本）については、『『日本名山図会』と川村寿庵』（岩手県立博物館、平成20年）に紹介されている。

しかし、そこに写真版で紹介されている安藤昌益由来の処方群（二丁分）は、すべてではない。ここでは、そのすべてを紹介し、かつ『真斎謾筆』（京大・富士川本）および『良中先生自然真営道方』（杉玄達撰、内藤記念くすり博物館蔵本）との「原文」の比較により、『真斎謾筆』などが稿本『自然真営道』の処方群その他の内容をどれだけ反映したものとなっているか、という課題について考察してみよう。

なぜなら、『真斎謾筆』の内容については、八重樫新治氏〔「しらべるかい」第8号、2011年12月〕により稿本『自然真営道』をどれほど正確に伝承しているかということが議論され、「『真斎謾筆』が稿本『自然真営道』を書写したものだという説」に対して否定した」、という見解が発表されているからである。

なお、『真営堂雑記』（東京国立博物館蔵本）にも、『真斎聚方』に出ている処方が六件ほどあるので、併せて比較することとしたい。

【凡例】

- ・各処方名の前の○印は、原文にない場合でも、わかりやすくするために付けている。
- ・原文の薬物の分量表記は、小文字の部分が多いが、原則として薬物と同じサイズとした。
- ・「一字薬名」の合成文字は、原則として「木瓜（＊）」などのように開いて〔二字以上にすること〕表記した。
- ・字体は、原則として新字体としたが、旧字体のままとしたところもある。
- ・『真斎謾筆』などには、処方名が同一のものがいくつかみられるが、総合的判断によって選択し、比較をおこなった。
- ・「全・十五」＝『安藤昌益全集』（第十五巻、農文協刊）

【主要原文比較資料一覧】

- ・『真斎聚方』（川村真斎著、内藤記念くすり博物館蔵本）
- ・『真斎謾筆』（川村真斎著、京都大学図書館・富士川文庫本、同図書館Webにて公開）〔参照資料＝「全・十五」〕
- ・『良中先生自然真営道方』（杉玄達撰、内藤記念くすり博物館蔵本、同博物館Webにて公開）〔参照資料＝「全・増補篇一」および『青森県史、史料編、近世、学芸関係』（2004）〕
- ・『真営堂雑記』（東京国立博物館蔵本）
〔参照資料＝『真営堂雑記』、安藤昌益と北千住の関係を調べる会、2013〕

Ⅱ 『真斎聚方』における稿本『自然真営道』の処方群と、『真斎謾筆』および『良中先生自然真営道方』の処方群

との「原文」による比較と考察

1-1 ○「靈妙湯」について

《○ 茎湿瘡ノ所以ハ、古説ノ下疳也。》 [全・十五、456頁]

A・『真齋聚方』（195丁ウ〔ウラ〕）

○ 靈妙湯 真宮

石決明 一錢 辰 五厘 龍腦 二厘五毛 海蛤甲 一錢

真珠 一厘

右五味為末作一貼土茯苓四十錢 水五合為三合入粉藥一晝夜服之如此至
八日

B・『真齋謾筆』（京大・富士川本、No.456, 原文より引用）

○ 茎瘡、腐爛甚ク毒溢レ囊爛レ、其近キ所ニ平陷瘡出ル者ハ、是レ濕毒既ニ
深シ。是レハ輕劑ヲ以テ治スルコト能ハズ、是レ靈妙湯小半劑ノ症也。

○ 靈妙湯 小半劑ハ乃チ一劑ノ四ケー也。

土茯苓 四十目 石決明 一錢 辰砂 五厘 龍腦 二厘五毛

真珠 一厘 海蛤甲 一錢

右五味、為細末トナシ、一合セニ勻ヒ一貼トナシ、土茯苓 四十目、水三椀
入レ煎ジテ二椀トナシ、右一貼ノ粉藥ヲ入レ攪勻シ、一晝夜ニ之レヲ服シ尽
ス、此ノ如クスルコト、毎月八日ニ至テ土茯苓二斤服シ終リ、八日ヲ八日ヲ
以テ一周トナス也。

B・『真齋謾筆』（京大・富士川本、No.456、457, 原文より引用）

○ 靈妙湯 本方

土茯苓 一斤 石決明 一兩 辰砂 二分 龍腦 一分

真珠 五厘 海蛤甲 一兩

右五味、為細末トナシ合勻シ一貼トナス。土茯苓 一斤、水十二椀ヲ以テ
八椀トナシ、右一貼ノ粉藥ヲ入レ攪勻シ、一晝夜ニ此八椀ヲ服シ尽ス也。

毎日此ノ如クシテ服シ八日ニ至テ一周トナストキハ、如何ナル腐リ堀〔マ
マ〕レタル惡瘡モ之レヲ治セザルコトナシ。若シ八日一劑ヲ尽シテ全快セザ
ル者ハ又一劑ヲ服スベシ、全ク愈ル也。

右土茯苓、味・性・能・功ノ所以及ビ石決明、辰砂、龍腦、真珠、海蛤甲
凡テ五味ノ性・能・功ノ所以ハ、藥性記、靈妙湯ノ部ヲ併見スベシ。

古方、五鳳丹ト名クルモノハ、鍾乳石・琥珀ヲ用ユレドモ不宜也。

C・『良中先生自然真宮道方』

（杉玄達撰、内藤記念くすり博物館蔵本、No.186、原文より引用）

○ 茎瘡腐爛甚毒溢囊爛其所近平陷瘡出者是濕毒瘡已深是靈妙湯服也。

○ 靈妙湯 小半劑乃一劑四一

土茯苓 四十錢 石決 一錢 辰砂 五厘 龍腦 二厘五毛

真珠 一厘 海甲（ハマグリ） 一錢

右五味為末一合勻為一貼

D・稿本『自然真當道』「甘味ノ諸藥・自然ノ氣行」

（全・十六上、影印版より書き下して引用）

○ 全通靈妙湯

△ 土茯苓 百六十目 石決明 二両 辰砂 二分 龍腦 一分

真珠 五厘 海蛤甲（ハマグリ） 一両

○ 古説ノ方ニ琥珀ヲ加フレドモ 是レハ似セ者ニシテ 其ノ氣行ヲ知ラ

ザル故ニ之レヲ去ル。又、鍾乳石ヲ加フレドモ、石藥多キ則ハ土茯苓ノ

能・効沈ンデ利ク所無キ故ニ之レヲ去ル。・・・

水十二碗ヲ以テ煎ジテ八碗トナシ、每一碗ニ末藥一貼ヲ入レ、攪勻ヒ

温服ス。一昼夜ニ服シ尽ス。毎日常一料ヲ用ヒ、八日ニシテ乃チ愈ユ。

○ 古方ニ十二料、十二日トスルハ、私作ノ十二經ニ迷フ私作ノ妄失ナリ。

【考察〈1〉】

Aの前に、《○ 茎濕瘡ノ所以ハ、古説ノ下疳也。》と表示したのは、表題の処方が稿本『自然真當道』のどの項目内にあるのかを示すためである〔以下、同〕。

昌益の「自然真當道方」の中で、「靈妙湯」は独創的な最も重要な処方として、位置付けられているようである。B・『真齋謾筆』の中には、上記に引いたように二か所に詳細に述べられているからである。D・稿本『自然真當道』「甘味ノ諸藥・自然ノ氣行」にも、詳細に解説されていることは、昌益自身が重要な処方としていたことに間違いがないであろう。

B・『真齋謾筆』が、稿本『自然真當道』をどれほど正確に伝承しているかということが八重樫新治氏〔「しらべるかい」第8号、2011年12月〕により議論されているが、上記のA～Dの資料群を比較すると、B・『真齋謾筆』の内容は、最も詳細であり、十分に昌益の処方を伝承していると考えてよいであろう。

以下の考察においても、このような問題意識を持ちつつ進めていこう。

B・『真齋謾筆』（「靈妙湯 本方」）に、「古方、五鳳丹ト名ク」とあるが、この「古方」とは、『万病回春』を指している。さらに、D・「甘味ノ諸藥・自然ノ氣行」における「古説ノ」および「古方ニ」のいずれも、『万病回春』を指している。これらは、昌益の医学的立場をとらえる上で、重要な問題である。

私は、すでに拙著『安藤昌益の思想』（1989）において、昌益のいう「古方」とは、「古説」であることを明らかにしているが、未だに昌益のいう「古方」を「後世派」に対立するところの「古方派」と解釈している人がある（山崎庸男『安藤昌益の実像』209頁、2016）ので、ここに再度述べておくことにする。

八重樫氏〔「しらべるかい」第8号〕は、また「『甘味ノ諸藥・自然ノ氣行』と

稿本『自然真當道』「藥性紀卷」の関連については、検証できてはいない」と述べている。しかし、上記のD・「甘味ノ諸藥・自然ノ氣行」とB・『真齋謾筆』との関連性は明らかであり、D・「甘味ノ諸藥・自然ノ氣行」が、稿本『自然真當道』「藥性紀〔記〕卷」の内容の一部を成していることは、疑いがないところであろう。

1－2 ○「全脛湯」について

《○ 脛瘡ノ所以及ビ治方 古説ノ膝瘡也》 〔全・十五、456頁〕

A・『真齋聚方』（195丁ウー196丁オ）

○ 全脛湯

木瓜（＊）・蒼・茯・陳 各二錢 五倍・葛・芩・防 各一錢〔半〕

○ 外治方 五倍・椒 各等分 水煎。洗瘡乃 五倍・椒 等分

為末擦之有効。

B ・『真齋謾筆』（京大・富士川本、No.458, 原文より引用）

○ 全脛湯 治脛瘡濕毒初発

木瓜（＊）・蒼・茯・陳 各二錢 五倍・葛・芩・防 各一錢半

○ 外治ノ方 五倍子・山椒 各等分 水煎。之レヲ以テ瘡ヲ洗ヒ浄メ

再ビ五倍子・山椒 等分 細末トナシ、之レヲ搽ルニ効アリ。

C ・『良中先生自然真営道方』

（杉玄達撰、内藤記念くすり博物館蔵本、No.187、原文より引用）

○ 全脛湯 治脛瘡濕毒初発

木瓜・蒼朮・茯苓・陳皮 各二錢 五倍・葛根・車前・防風 各一錢半

○ 外治方 五倍・山椒 等分 洗瘡

【考察〈2〉】

A・B・Cの中では、A・『真齋聚方』が最も簡略化されていることがわかる。

B・『真齋謾筆』とC・『良中先生自然真営道方』を比較すると、Cは簡略化されているが、処方の要点は維持されており、昌益の処方伝承されているといえよう。BとCを統合することによって、昌益の真営道医学は相当程度の復元が可能である。これは、単にいくつかの処方を比較した発言ではなく、BとCの全記述を比較した上での結論であることを述べておきたい。

1－3 ○「正身神妙飲」について

《○ 打瘡ノ所以、破折ノ所以・・・》〔全・十五、462頁〕

A ・『真齋聚方』（196丁オ）

○ 正身神妙飲

靈天 一両 楊梅皮 二錢 沼菱殻 三錢

右 三味 為末以酒服

薯蕷去皮以銅摺 四十錢 楊梅末 二十錢 攪合以雞子白演之

如元居骨塗之以晒布覆之当証以麻糸絡之以綿覆之

B ・『真齋謾筆』（京大・富士川本、No.461, 462、原文より引用）

○ 正身神妙飲 絶一切之打身ノ根

靈天蓋 一両 楊梅皮 二錢 沼菱 三錢

右 三味 細末トナシ酒ヲ以テ之レヲ服ス。・・・

薯蕷ヲ用テ皮ヲ去リ、銅ヲ以テ摺リ、此分量四十目ニ楊梅皮ノ末

二十目ヲ攪キ合セ、雞子ノ清白ヲ以テ之レヲ摺リ演ベ、骨ヲ居直

シタル処ニ之レヲ擦リ、晒布ノ切ヲ以テ之レヲ覆ヒ、其上ニ薄梘ヲ
当テ麻糸ヲ以テ之レヲ絡ヒ、其上ヲ新綿ヲ以テ包ミ覆ヒ、・・・

C ・『良中先生自然真當道方』

(杉玄達撰、内藤記念くすり博物館蔵本、No.189、原文より引用)

- 正神身妙飲 絶一切之打身根
靈天 一両 楊梅 二錢 沼菱 三錢
右 三味 為細末以酒服有効

Z ・『真當堂雜記』(東京国立博物館蔵本、7丁〔ウ〕、原文より引用)

- 正身神妙飲
靈天蓋 一両 楊梅皮 二錢 沼菱 三錢
同上〔酒ニテ用ユ〕

【考察〈3〉】

Cには、「正神身妙飲」とあるが、転記ミスであろう。Aの末尾の二行は、小文字で二行書きとなっているが、Bにより昌益の文章であることがわかる。

Bが最も詳細で、真當道医学を伝えていることは明らかである。Zは、薬物の表記がBと同一である。

1-4 ○「散滅湯」について

《○ 切傷瘡 古説ノ金瘡也。》 [全・十五、463頁]

A ・『真齋聚方』(196丁オ)

- 散滅湯
芎・芷・細・柴 各一錢半 陳・茯・芍 各一錢二 甘 小
右 治破傷風

B ・『真齋謾筆』(京大・富士川本、No.464、原文より引用)

- 切疵外邪ニ冒サルルトキハ 古説ノ破傷風也
○ 散滅湯 治切疵冒於外邪而感氣浮遅者
芎・芷・細・柴 各一錢半 陳・茯・芍 各一錢二 甘 少
水煎。
顔服汗出テ外邪去ルトキハ、乃チ疵口ニ灸シ収愈膏ヲ就ケテ生肉湯ヲ
服シテ之レヲ治ス。

C ・『良中先生自然真営道方』

(杉玄達撰、内藤記念くすり博物館蔵本、No.189、原文より引用)

○ 切疵冒外邪 古説破傷風

○ 散滅湯 治切疵外邪冒脉浮遲者

川芎・白芷・細辛・柴胡 各一錢五分 陳皮・茯苓・芍薬 各一錢
二分 甘草 少

【考察 (4)】

Aに「治破傷風」とあるのは、Bにおける「古説ノ破傷風也」を踏まえた上での真斎による記述であろう。

1 - 5 ○「解火湯」について

《○ 焼爛瘡 古説ノ湯火瘡》 [全・十五、465頁]

A ・『真斎聚方』(196丁オ)

○ 解火湯

● [クサカンムリに下]・麦冬(*)・梔・芩 各一錢半

茯・梨実・陳・甘 各一錢二分

治湯火傷

○ 外治方 大根葉為末演荏油搽患處經一夜速見効

B ・『真斎謾筆』(京大・富士川本、No.465、原文より引用)

○ 解火湯 瀉湯火瘡之火毒

生● [クサカンムリに下] (*)・麦冬(*)・梔・芩 各一錢半

茯・梨 陰干ノモノ・陳・甘 各一錢二分 水煎。

火毒未ダ内ニ入ラザル者ハ内ニ入ルコトヲ防ギ、既ニ内ニ入ル者ハ其
火毒ヲ解スル也。

○ 外治ノ方ハ 大根ノ葉能ク日ニ干シ細末ト為シ荏ノ油ニ演べ鳥ノ羽ヲ
以テ患フル處ニ搽ル。一夜ヲ経ルニ速ク効ヲ見ハス。神妙ノ藥也。得ヤ
スキヲ以テ輕ンズルコト勿レ。

C ・『良中先生自然真営道方』

(杉玄達撰、内藤記念くすり博物館蔵本、No.190、原文より引用)

○ 焼爛瘡 古説火傷也

○ 解火湯 瀉湯火瘡火毒

生地・麦門・梔子・黄芩 各一錢半

茯苓・梨肉 陰干・陳皮・甘草 各一錢二分

○ 外治方 大根葉日干為細末演荏油以鳥羽搽患處

Z ・『真當堂雜記』（東京国立博物館蔵本、7丁ウ、原文より引用）

○ 解火湯

生地・麦門・梔子・黄芩 各一錢半

茯苓・梨肉 陰干・陳皮・甘草 各一錢二分

○ 外治 大根葉 鳥羽ニテ荏油ニ和シヒク

【考察（5）】

BとCの「瀉湯火瘡之火毒」という記述の一致、AとCの外治方の解説記述の酷似が注目されるが、内容的にはBにまさるものはない。Aの「治湯火傷」の記述も「古説ノ湯火瘡」を踏まえた上での、真齋による記述であろう。

Zの「解火湯」の薬物表記は、ここではCと同一である。

1－6 ○「急破瘡方」について

《○ 急破瘡ノ所以及ビ治方 俗ニ所謂構太刀（かまいたち）》〔全・十五、466頁〕

《○ 府毒瘡ノ所以及ビ治方 古説（ノ）癰（也）》〔全・十五、429頁〕

A ・『真齋聚方』（196丁オ）

○ 急破瘡方 俗云構太刀

芎・香附（＊）・烏・柴 各一錢二分

荊・細・腹・夏 各一錢

散毒也

B ・『真齋設筆』（京大・富士川本、No.466、原文より引用）

○ 急破瘡ノ所以及ビ治方 俗ニ所謂構太刀、此コトラ「カマイタチ」ト云。

B ・『真齋設筆』（京大・富士川本、No.422、原文より引用）

○ 散毒湯 散腐毒瘡未為膿者

芎・香附（＊）・烏・柴 各一錢二分

荊・細・腹・半 各一錢

右 水煎

C ・『良中先生自然真當道方』

（杉玄達撰、内藤記念くすり博物館蔵本、No.183、184、原文より引用）

○ 府毒瘡 古説之癰也

○ 散毒湯 散腐毒瘡未為膿者

川芎・香附・烏藥・柴胡 各一錢二分

荊芥・細辛・腹皮・半夏 各一錢

每灸易散滅膏也

【考察〈6〉】

Aの「急破瘡方」の処方内容は、「外瘡門」の最初にある「散毒湯」であることがわかった。

2-1 ○「散毒膏」について

《○ 諸油ト瘡毒ト応・不応ノ所以ハ・・・》 [全・十五、445頁]

A ・『真齋聚方』（196丁オ）

○ 外治散毒膏

附・草・烏頭・細・干姜 各十銭

桂・芎・烏・芷 各二十銭

修法剤八味薬浸香油二斤一宿用火熬之薬至焦色以生絹漉之去渣又

熬下柳棍不住手攪之滴水成珠為度離火入乳香沒藥末 各四銭

攪勻収貯

B ・『真齋設筆』（京大・富士川本、No.444、原文より引用）

○ 散毒膏 散滅一切之瘡毒也。

附子・草烏頭・細辛・乾姜 各十銭

肉桂・川芎・烏薬・白芷 各二十銭

・・・・・・

其修法ハ右八味ノ薬ヲ剤ミ二斤ノ香油ニ浸スコト一宿シ、火ヲ用テ之

レヲ熬ル。薬、焦色ニナルニ至テ生絹ヲ以テ之レヲ漉シ、渣ヲ去リ油

ノミヲ用テ又熬シ、柳ノ棍ヲ下シ手ヲ住メズ之レヲ攪旋シ、水ニ滴シテ

珠ヲナスヲ度トシ、火ヲ離シテ乳香・沒藥ノ末各四銭ヲ入ルルトキハ、

微辛味・微温性・微散能也。此時、油ト薬ノ間ヲ和ゲ攪勻シ収メ貯フテ

火毒ヲ退ケ、之レヲ用テ・・・

C ・『良中先生自然真営道方』

（杉玄達撰、内藤記念くすり博物館蔵本、No.185、原文より引用）

○ 散毒膏 治散滅一切瘡毒者

附子・草烏・細辛・干姜 各十銭

肉桂・川芎・烏薬・白芷 各二十銭

右八味浸二斤香油一夜用火熬之薬至焦色以薄紙漉去滓用油又

熬下柳棍不住手攪之滴水成珠為度離火入乳香沒藥末 入各四銭

用之

Z ・『真営堂雜記』（東京国立博物館蔵本、8丁オ、原文より引用）

○ 散毒膏

附子・草烏頭・細辛・干姜 各十錢

肉桂・川芎・烏藥・白芷 各二十錢

香油二斤浸一宿

【考察〈7〉】

AとCの説明文の類似は、稿本『自然真営道』の原文を彷彿とさせるものである。Bからわかるように、「其修法・・・」の文章は、処方次の頁に書かれているにもかかわらず、A・B・Cともに、この同じ部分を引いているのは、その重要性を理解しての上であろう。

Zの薬物表記は、やはりBに一番近い。

2-2 ○「漆瘡方」について

《○ 漆瘡ノ所以及ビ治方》〔全・十五、467頁〕

A・『真斎聚方』（196丁オ）

○ 漆瘡方

●〔クサカンムリに下〕・梔

生摺演搽之

B・『真斎謔筆』（京大・富士川本、No.467、468、原文より引用）

○ 漆瘡ノ所以及ビ治方・・・

○ 治方ハ、生●〔クサカンムリに下〕・梔子

二味生ニテ摺リ演べ之レヲ貼ルトキハ、乃チ治スル也。

C・『良中先生自然真営道方』

（杉玄達撰、内藤記念くすり博物館蔵本、No.190、原文より引用）

○ 漆瘡

○ 治方 生地・梔子

二味生摺演搽之乃治也

【考察〈8〉】

A・B・Cともに、稿本『自然真営道』の原文に忠実な内容である。

2-3 ○「蜂螫」について

《○ 虫螫瘡及ビ治方ハ・・・》 [全・十五、467頁]

A ・『真齋聚方』(196丁オ)

○ 蜂螫

以甘草浸水搽之

B ・『真齋謾筆』(京大・富士川本、No.468、原文より引用)

○ 虫螫瘡及ビ治方ハ・・・

○ 蜂ニ●〔口ヘンに角〕レ腫痛スルニハ味噌ヲ布テ之レヲ灸ス。

又甘草ヲ以テ水ニ浸シ之レヲ搽ル

C ・『良中先生自然真営道方』

(杉玄達撰、内藤記念くすり博物館蔵本、No.190、原文より引用)

○ 虫螫瘡

・・・・・・

蜂●〔口ヘンに角〕腫痛味布味噌灸之

【考察〈9〉】

Bは、AとCの両方の内容を含んでいる。

2-4 ○「諸骨咽ニ立ツノ方」について

《○ 諸骨咽ニ立ツノ方ハ、・・・》 [全・十五、469頁]

A ・『真齋聚方』(196丁オ・ウ)

○ 諸骨

硬象牙為末以管吹入咽乃下是速効妙薬也

B ・『真齋謾筆』(京大・富士川本、No.469、470、原文より引用)

○ 諸骨咽ニ立ツノ方ハ、魚鳥一切ノ骨、咽ニ立チタルニハ、甘草ヲ以テ

末トナシ蜜ヲ以テ大豆ノ大サニ丸シ、辰砂ヲ以テ衣トナシ、三五粒嚙ミ

下スニ、口津ヲ以テ飲メバ骨腐棄スレバ咽ヲ下ル也。

○ 又方 象牙ヲ以テ末トナシ、管を以テ咽ニ吹き入ルトキハ、

乃チ下ル。是レ速効ノ妙薬也。

C ・『良中先生自然真営道方』

(杉玄達撰、内藤記念くすり博物館蔵本、No.191、原文より引用)

- 諸骨咽立
- 秘方 以甘草為末以蜜丸大豆大以辰砂為衣三五粒嚙下以口津乃飲骨腐柔下咽
- 又方 以象牙為末以管吹入咽

【考察〈10〉】

Bは、AとCの原文を踏まえた上での書き下し文となっていることが明らかである。

2-5 ○「癩疾方」について

《○ 惡毒・濕瘡ノ所以及ビ治方ハ 古説ノ厲風 》 [全・十五、469頁]

A ・『真齋聚方』(196丁・ウ)

- 癩疾方
靈妙湯大半剤方加海漂消一兩用之八日一周也。
每周加増海漂消一兩四周愈

B ・『真齋謾筆』(京大・富士川本、No.470、472、原文より引用)

- 惡毒・濕瘡ノ所以及ビ治方ハ 古説ノ厲風感氣ハ細動也
- 初発ノ治方ハ・・・
内葉ハ靈妙湯大半剤ノ方ニ海漂消一兩ヲ加へ、之レヲ用ユルコト八日一周也。一周ニ至テ少シク効アルトキハ、次ハ本方一剤ヲ以テ海漂消二兩ヲ加へ、之レヲ用ヒ二周ニ至テ大半愈ユベシ。又一剤ヲ用テ三周ニ至テ全快スル也。若シ少シク全快ニ至ラザルコトアラバ、又一剤ヲ用テ四周ニ至リ、根ヲ断テ治スベキ也。

C ・『良中先生自然真営道方』

(杉玄達撰、内藤記念くすり博物館蔵本)

- 【A・Bに該当する記述なし。】

【考察〈11〉】

Aは、Bの内容を簡略化していることがわかる。Bの内容が、稿本『自然真営道』の内容を反映している。Bの「古説ノ厲〔癩〕風」とは、「癩病」のことである。Cに該当する記述が見当たらないのは、「〇〇湯」などのような明確な処方名の「見出し」と薬物群の記述がなかったからであろう。

3-1 ○「生肉湯」について

《○ 府毒瘡ノ所以及ビ治方 古説（ノ）癰（也）》 〔全・十五、429頁〕

A ・『真斎聚方』（196丁・ウ）

○ 生肉湯 治腐毒瘡出膿者

芍・当・芪・遠 各一錢半

桂・干姜（*）・茯苓・半夏 各一錢

B ・『真斎謾筆』（京大・富士川本、No.423、原文より引用）

○ 生肉湯 治府毒瘡去膿者 此方、助元氣回氣托膿新生肌肉也

芍・当・芪・遠 各一錢半

桂・干姜（*）・茯苓・半夏 各一錢 水煎

此方、愈テノ跡、其疵ヲ知ラズ

C ・『良中先生自然真當道方』

（杉玄達撰、内藤記念くすり博物館蔵本、No.184、原文より引用）

○ 生肉湯 治助元氣回氣托膿生新肌肉府毒瘡去膿者

芍藥・当歸・黃耆・遠志 各一錢五分

肉桂・干姜・茯苓・半夏 各一錢

Z ・『真當堂雜記』（東京国立博物館蔵本、8丁オ、原文より引用）

○ 生肉湯

芍藥・当歸・黃耆・遠志 各一錢半

肉桂・干姜・茯苓・半夏 各一錢

【考察〈12〉】

Bの「此方、助元氣・・・」の小文字文は、Cから昌益の文章であることがわかる。しかし、Bの文章の順番の方がわかりやすく、内容を理解した文章である。

Bは、文章を「書き下し」てはいるが、稿本『自然真當道』の内容を一番理解している文章であり、信頼できるものである。

Zの薬物表記は、Cと同一であるが、前半の分量表記「各一錢半」は、A・Bと同一である。Zの筆録者は、真斎の弟子たちと思われるので、Zは、AとBに類似しているのは当然のことであろう。

3-2 ○「鎮蒸湯」について

《○ 府毒瘡ノ所以及ビ治方 古説（ノ）癰（也）》 〔全・十五、429頁〕

A ・『真斎聚方』（196丁・ウ）

○ 鎮蒸湯 治腐瘡内熱甚者

当・芍・枳・梔 各一錢半

大・硝・通・夏 各一錢

B・『真齋設筆』（京大・富士川本、No.423、原文より引用）

○ 鎮蒸湯 治腐毒瘡内熱甚者

当・芍・枳・梔 各一錢半

大・芒・通・半 各一錢 水煎

内熱解シ大便通ズルトキハ、此藥ヲ止ム

C・『良中先生自然真當道方』

（杉玄達撰、内藤記念くすり博物館蔵本、No.184、原文より引用）

○ 鎮蒸湯 治腐毒瘡内熱甚者

当歸・芍藥・枳殼・梔子 各一錢半

大黃・芒硝・木通・半夏 各一錢

熱解通大便則止

【考察〈13〉】

Aの「治腐瘡」は、「治腐毒瘡」が正しい。A・B・Cともに稿本『自然真當道』の内容に忠実であると思われる。

3-3 ○「救元湯」について

《○ 藏毒瘡 古説ノ疽也 》 [全・十五、432頁]

A・『真齋聚方』（196丁・ウ）

○ 救元湯 治藏毒瘡膿成引内者

桂・干姜・附・芪 各一錢二分

陳・夏・茯・甘 各炒一錢

B・『真齋設筆』（京大・富士川本、No.427、原文より引用）

○ 救元湯 治藏毒瘡膿成而引内者

桂・干姜・熟附（*）・芪 各一錢二分

陳・半・茯・甘 炒、各一錢

C・『良中先生自然真當道方』

（杉玄達撰、内藤記念くすり博物館蔵本、No.184、185、原文より引用）

○ 救元湯 治藏毒瘡膿成而引内

肉桂・干姜・和附・黃耆 各一錢二分

陳皮・半夏・茯苓・甘草 各一錢

【考察〈13〉】

A・B・Cともに同一であり、稿本『自然真當道』に忠実であるといえよう。

3-4 ○「助元勻蔵湯」について

《○ 蔵毒瘡 古説ノ疽也 》 [全・十五、432頁]

A・『真齋聚方』(196丁・ウ)

- 助元勻蔵湯 治蔵毒瘡潰膿不止
- 桂・干姜(*)・附・茯 各一錢半
- 芪・当・芍・遠 各一錢二分

B・『真齋設筆』(京大・富士川本、No.427、428、原文より引用)

- 助元勻蔵湯 治蔵毒瘡潰而膿不止者
- 桂・干姜(*)・附・茯 各一錢半
- 芪・当・芍・遠 各一錢二分 水煎
- 頻々之レヲ服スルトキハ元氣盛ンニ蔵氣調和シ食進ミ肌肉ヲ生ジ膿
自ラ止テ全快スル也

C・『良中先生自然真當道方』

(杉玄達撰、内藤記念くすり博物館蔵本、No.185、原文より引用)

- 助元勻蔵湯 治蔵毒瘡潰膿不止者
- 肉桂・干姜・和附・茯苓 各一錢半
- 黄耆・当歸・芍薬・遠志 各一錢二分

【考察〈14〉】

A・B・Cともに同一であり、稿本『自然真當道』に忠実であるといえよう。

4-1 ○「腐毒膏」について

《○ 諸油ト瘡毒ト応・不応ノ所以ハ・・・》 [全・十五、445頁]

A・『真齋聚方』(196丁・ウ)

- 腐毒膏
- 蒲黄・百部・茅根・●〔クサカンムリに下〕 各十一錢
- 当・麦冬(*)・紅・膝 各十七錢

修法剤八味薬浸香油二斤一宿以火熬之薬至蕉色以生絹漉之去渣用油又
熬下柳棍攪之不住手滴水為珠離火取貯

B・『真齋設筆』（京大・富士川本、No.445、原文より引用）

○ 腐毒膏 腐採一切之腫瘡既成膿者

蒲黄・百部根・茅根・熟地 各十二錢

当歸・麦門・紅花・牛膝 各十七錢

.....

其修法ハ右八味ノ薬ヲ剤ミ二斤ノ香油ニ浸スコト一宿シ、火ヲ以テ之
レヲ熬シ、薬、蕉色ニナルニ至テ生絹ヲ以テ之レヲ漉シ、渣ヲ去リ油
ヲ用テ又熬シ、柳ノ棍ヲ下シ之レヲ攪旋シ、手ヲ住メズ水ニ滴シ、珠ヲ
ナスヲ度トナシ、火ヲ離レ収メ貯ヘ火毒ヲ退ケ、諸毒ニ応ジテ用ユル也。

C・『良中先生自然真営道方』

（杉玄達撰、内藤記念くすり博物館蔵本、No.185、原文より引用）

○ 腐毒膏 腐採一切腫瘡已為膿者

蒲黄・百部根・茅根・熟地 各十二錢

当歸・麦門・紅花・牛膝 各十七錢

右棟方照、但後二味之細末不入也

Z・『真営堂雜記』（東京国立博物館蔵本、8丁ウ、原文より引用）

○ 腐毒膏

蒲黄・百部根・茅根・熟地 各十二錢

当歸・麦門・紅花・牛膝 各十七錢

【考察〈15〉】

Zの薬物表記は、B・Cと同一である。昌益の薬物表記は、「一字薬名」ではなく、B・C・Zのような薬物表記であった可能性がある。

Cの「右棟方照」とは、この処方の前にある「散毒膏」〔前出の2-1、参照〕における次の説明文のことである。

右八味浸二斤香油一夜用火熬之薬至蕉色以薄紙漉去滓用油又

熬下柳棍不住手攪之滴水成珠為度離火入乳香没薬末 入各四錢

用之

そして、「但後二味之細末不入也」とは、「乳香没薬末 入各四錢」を指している。

つまり、『真齋聚方』における処方の順番は、『真齋設筆』および『良中先生自然真営道方』の順番どおりではなく、真齋により前後に入れ替えなどが見られるということである。本稿では、『真齋聚方』における処方の順番で記述し、B・Cについては原文のNo.〇〇を示し、その順番の前後が確認できるように配慮している。

4-2 ○「収愈膏」について

《○ 諸油ト瘡毒ト応・不応ノ所以ハ・・・》 [全・十五、445頁]

A ・『真斎聚方』（196丁・ウ）

○ 収愈膏

酸棗・山茱・烏梅・楤梔 各十錢

芍・遠・陳・赤豆 各二十錢

修法如前

以散毒・腐毒・収愈 良仲子之三膏也 一切之腫物以三膏治之

B ・『真斎設筆』（京大・富士川本、No.445、原文より引用）

○ 収愈膏 一切之瘡毒既膿尽者主之

酸棗仁・山茱萸・烏梅・楤梔 各十錢

芍藥・遠志・陳皮・赤小豆 各二十錢

C ・『良中先生自然真営道方』

（杉玄達撰、内藤記念くすり博物館蔵本、No.185、原文より引用）

○ 収愈膏 収愈一切之瘡毒已尽膿者

酸棗・山茱・烏梅・楤梔 各十錢

芍藥・遠志・陳皮・小豆 各二十錢

右照前

Z ・『真営堂雜記』（東京国立博物館蔵本、8丁ウ、原文より引用）

○ 収愈膏

酸棗仁・山茱萸・烏梅・楤梔 各十錢

芍藥・遠志・陳皮・赤小豆 各二十錢

【考察（16）】

Zの薬物表記は、Bと全く同一である。それにしても、Bの処方群では、「一字薬名」表記がほとんどであるが、「三膏」（散毒膏・腐毒膏・収愈膏）では、フル薬名表記であるのはどういうことであろうか。まさに「三膏」は、薬物表記も特別扱いである。

Aの「修法如前」とCの「右照前」とは、「4-1」の「腐毒膏」を参照せよということである。

「良仲子之三膏也」「一切之腫物以三膏治之」の文は、真斎によるものであるが、『真斎設筆』にも、「此三膏ノ外、膏薬之レアルコトナキ也。」「是レ膏ハ、三膏ニ極ル所以也。」（全・十五、450頁）とあり、散毒膏・腐毒膏・収愈膏を昌益自身も「三膏」と位置づけ、相当の自信を有していたことがわかる。これまで昌益の処方と言えは「安肝湯」だけが特別扱いされてきたように思えるが、昌益自身からすれば、この「三膏」などが彼の代表的処方であったのではないだろうか。

ここで思い出されるのは、昌益の師の系統である味岡三伯（三代目）が、「腫れ物」の名医として知られていたことである。昌益のこの「三膏」は、その味岡三伯の学統を受け継いでいるのかも知れない。

5-1 ○「健脚湯」について

《○ 外湿・膝腫ノ所以 古説ノ鶴膝風。》 [全・十五、409頁]

A ・『真斎聚方』(196丁・ウ、197丁・オ)

○ 鶴膝風方 治左膝 健脚湯

木瓜・芍・陳・枳 各一錢五分

当・桂・干姜(*)・茯 各一錢一分

B ・『真斎謾筆』(京大・富士川本、No.401、原文より引用)

○ 健脚湯 治左膝腫痛而感氣浮細帶動者

木瓜(*)・芍・陳・枳 各一錢五分

当・桂・干姜(*)・茯 各一錢二分

C ・『良中先生自然真営道方』

(杉玄達撰、内藤記念くすり博物館蔵本、No.178、原文より引用)

○ 健脚湯 治左膝腫痛脉浮細動者

木瓜・芍薬・陳皮・枳殻 各一錢五分

当歸・肉桂・干姜・茯苓 各一錢二

【考察 (17)】

Aの「健脚湯」の前に「鶴膝風方」とあるのは、「古説ノ鶴膝風」からの表示であろう。「治左膝」は、B・Cの処方の説明文からのものである。

5-2 ○「正脚湯」について

《○ 外湿・膝腫ノ所以 古説ノ鶴膝風。》 [全・十五、409頁]

A ・『真斎聚方』(197丁・オ)

○ 治右膝 正脚湯

当・陳・茯・木瓜 各一錢三分

桂・楊梅・蒼・沢 各一錢一分

B ・『真斎謾筆』(京大・富士川本、No.401、原文より引用)

○ 正脚湯 治右膝腫痛而感氣遲細帶動者

当・陳・茯・木瓜 各一錢二分 水煎

[桂・楊梅・蒼・沢 各一錢一分]

C ・『良中先生自然真営道方』

(杉玄達撰、内藤記念くすり博物館蔵本、No.179、原文より引用)

○ 正脚湯 治右膝腫痛脉遅細

当帰・陳皮・茯苓・木瓜 各一錢三分

肉桂・楊梅・蒼朮・沢瀉 各一錢一分

【考察〈18〉】

めずらしく、Bの〔 〕内の一行が欠落していることがわかる。『真斎謾筆』にもこの程度のミスはあるであろう。幸いA・Cにより、このようなミスも判明する。やはり、AとCの資料発見の意義は大きい。

5－3 ○「両脚達足湯」について

《○ 外湿・膝腫ノ所以 古説ノ鶴膝風。 》 [全・十五、409頁]

A ・『真斎聚方』（197丁・オ）

○ 治兩膝 達足湯

芍・当・芩・扨・ 各一錢半

木瓜（*）・酸棗（*）・通・茯 各一錢二分

B ・『真斎謾筆』（京大・富士川本、No.401、原文より引用）

○ 兩脚達足湯 治兩膝腫痛感氣剛動而数者

芍・当・芩・扨・ 各一錢半

木瓜（*）・酸・通・茯 各一錢二分 水煎

C ・『良中先生自然真営道方』

（杉玄達撰、内藤記念くすり博物館蔵本、No.179、原文より引用）

○ 兩脚達足湯 治兩膝腫痛脉剛動数者

芍薬・当帰・黄芩・梔子 各一錢半

木瓜・酸棗・木通・茯苓 各一錢二

【考察〈19〉】

Aの「治兩膝 達足湯」の表記は、5－1、5－2のAの表記と同じスタイルである。BとCは、内容的には同一である。

5－4 ○「達蹠湯」について

《○ 外湿・膝腫ノ所以 古説ノ鶴膝風。 》 [全・十五、409頁]

A ・『真齋聚方』（197丁・オ）

- 達踝湯 治踝腫痛歩行不能者

蒼・防・陳・芍 各一錢半

茯・桂・干姜（*）・薑 各一錢三

B ・『真齋設筆』（京大・富士川本、No.402、原文より引用）

- 達踝湯 治踝腫痛而不能歩行者

蒼・防・陳・芍 各一錢半

茯・桂・干姜（*）・薑 各一錢三分

C ・『良中先生自然真營道方』

（杉玄達撰、内藤記念くすり博物館蔵本、No.179、原文より引用）

- 達踝湯 治踝腫痛歩行不能

蒼朮・防風・陳皮・芍薬 各一錢半

茯苓・肉桂・干姜・藿香 各一錢三分

【考察〈20〉】

A・B・Cともに同一であるといえよう。

5－5 ○「平跟湯」について

《○ 外湿・膝腫ノ所以 古説ノ鶴膝風。 》 〔全・十五、409頁〕

A ・『真齋聚方』（197丁・オ）

- 平跟湯 治跟腫痛歩行不能者

木瓜（*）・連・当・芍 各一錢半

通・桑寄・桂・干姜（*） 各一錢二分

B ・『真齋設筆』（京大・富士川本、No.402、原文より引用）

- 平跟湯 治跟腫痛而不能歩行者

木瓜（*）・連・当・芍 各一錢半

通・桑寄・桂・干姜（*） 各一錢二分 水煎

C ・『良中先生自然真營道方』

（杉玄達撰、内藤記念くすり博物館蔵本、No.179、原文より引用）

- 平跟湯 治跟腫痛歩行不能

木瓜・黄連・当歸・芍薬 各一錢半

木通・桑寄・肉桂・干姜 各一錢二分

【考察 (21)】

A・B・Cともに同一であるといえよう。

6-1 ○「滋腎湯」について

《○ 内湿・腰痛ハ、腎ノ預リ。》 [全・十五、414頁]

A・『真斎聚方』(197丁・オ)

○ 滋腎湯 治腰痛

当・芍・●〔クサカンムリに下〕・茯 各一錢半

膝・地骨・薬 各一錢 甘 炙、八分

B・『真斎設筆』(京大・富士川本、No.406、原文より引用)

○ 滋腎湯 治常々腰痛感気沈細者

当・芍・熟●〔クサカンムリに下〕・茯 各一錢半

膝・骨・薬 各一錢 甘 炙、八分

C・『良中先生自然真営道方』

(杉玄達撰、内藤記念くすり博物館蔵本、No.181、原文より引用)

○ 滋腎湯 治常腰痛脉沈細者

当歸・芍薬・熟地・茯苓 各一錢半

牛膝・地骨・黄栢 各一錢 甘草 八分

【考察 (22)】

A・B・Cともにほぼ同一であるといえよう。

6-2 ○「降蒸湯」について

《○ 内湿・黄疸ハ、腎ノ預リ。》 [全・十五、415頁]

A・『真斎聚方』(197丁・オ)

○ 清〔降〕蒸湯 治前證口乾發熱大便實

枳・連・大・滑 各一錢二分

通・茯苓 各一錢 甘 三分

B・『真齋謾筆』（京大・富士川本、No.407、原文より引用）

○ 降蒸湯 治黃疸口乾發熱大便實感氣沈數者

枳・連・大・滑 各一錢二分

通・茯苓 各一錢 甘 二分五厘 水煎

C・『良中先生自然真當道方』

（杉玄達撰、内藤記念くすり博物館蔵本、No.181、原文より引用）

○ 降蒸湯 治黃疸口乾發熱大便實脉沈數者

枳實・黃連・大黃・滑石 各一錢二分

木通・茯苓・茵陳 各一錢 甘草 三分

【考察〈23〉】

Aの処方名「清蒸湯」は、「降蒸湯」が正しい。「清蒸湯」は、「降蒸湯」の一つ前の処方である。真齋先生も人間である、膨大な処方を収集しているのだから、たまにはこのようなケアレスミスもするであろう。

その他は、A・B・Cともにほぼ同一であるといえよう。

6－3 ○「正心湯」について

《○ 内湿・黄疸ハ、腎ノ預リ。》 [全・十五、415頁]

A・『真齋聚方』（197丁・オ）

○ 正心湯 治前症蒸汗黄染衣煩渴者

当・芍 各二錢

●〔クサカンムリに下〕・麦冬（*）・梔 各一錢二分

芪 一錢半 沢・猪 各一錢三分 通・甘 各一錢

B・『真齋謾筆』（京大・富士川本、No.407、原文より引用）

○ 正心湯 治黄疸入心蒸汗而黄染衣煩渴者

当・芍 各二錢

生●〔クサカンムリに下〕・麦冬（*）・梔 各一錢二分

芪 一錢半 沢・猪 各一錢三分 通・甘 各一錢

燈草 一団 水煎

感氣和数ハ生ク、細数ハ治シ難キ也

C ・『良中先生自然真営道方』

(杉玄達撰、内藤記念くすり博物館蔵本、No.182、原文より引用)

○ 正心湯 治黄疽入心蒸汗黄染衣煩渴者

当归・芍薬 各二銭 生地・麦門・梔子 各一銭二分

黄耆 一銭半 沢瀉・猪苓 各一銭三分

木通・甘草 各一銭 燈心 水煎

若脉和数生細数難治

【考察〈24〉】

Bの「燈草」、Cの「燈心」は、ともに「燈心草」のこと。

B・Cの最後に「難治」とあるのは、注目される。神医・安藤昌益にも手に負えない病はあったのである。

7-1 ○「除湿湯」について

《○ 外湿・湿疫。》 [全・十五、407頁]

A ・『真斎聚方』(197丁・オ)

○ 除湿湯 治湿疫

蒼・藿・夏・防・羌・荊・芷・細・茯 各一銭

甘 小 附 四分

以上 真営堂方也

B ・『真斎設筆』(京大・富士川本、No.398、原文より引用)

○ 除湿湯 治湿疫一般而感気沈細者

蒼・藿・半・防・羌・荊・芷・細・茯 各一銭

甘 少 和附 四分 生姜 五片 水煎

若シ頭甚ダ重キ者ハ葱白ヲ加フ

C ・『良中先生自然真営道方』

(杉玄達撰、内藤記念くすり博物館蔵本、No.178、原文より引用)

○ 除湿湯 治湿疫同病一般脉沈細者

蒼朮・藿香・半夏・防風・羌活・荊芥・白芷・細辛・茯苓 各一銭

甘草 和附 生姜

【考察〈25〉】

Bが一番詳しく正確であると思われる。

Aの最後に、「以上 真営堂方也」とあり、真斎の稿本『自然真営道』からの引用は、ここでいったん終了する。

まず、この「以上」とは、どの処方までを指すのかが問題となる。私は、上記

の1-1から7-1までの全ての処方を指していると解釈している。1-1の処方名の次の「真営」という出典がそれを物語っているからである。本稿の第二部の

8-1の処方名の次にも「真営」と出典が示されている。この「真営」とは、稿本『自然真営道』が出典であるということであろう。

次に、「真営堂方也」をどのように解釈するかが、ここで問題となる。すなわち、この「真営堂方也」を稿本『自然真営道』の処方群と解釈するのか、それとも川村真斎が医院の号として「真営堂」を掲げていたので、その医院の「真営堂」で頻用している処方という意味を指すのか、という問題である。

真斎の弟子たちが記録したと思われる『真営堂雑記』（東京国立博物館蔵本）にも、稿本『自然真営道』から多くの処方群が引かれていることから考えると、「真営堂方也」とは、基本的には稿本『自然真営道』の処方群ということであるが、真斎の医院の弟子たちにも公開されていたという点では、真斎の医院「真営堂」で頻用されていた稿本『自然真営道』の処方群という解釈も成立するのではないだろうか。

川村真斎は、その医院「真営堂」において、稿本『自然真営道』の処方群を実際に使用して、その診療をしていたと見てよいであろう。

このように考えると、私には、川村真斎が浩瀚な『真斎設筆』を作成し、さらには『進退小録』（東京国立博物館蔵本）をも作成したことの必然性が理解できるように思われる。

◎ 第二部 ◎

「1. はじめに」でも触れたように、上記、7-1、「除湿湯」までの原文は、

『『日本名山図会』と川村寿庵』（岩手県立博物館、平成20年）に写真版で紹介されている。

以下に紹介・検討する「8-1」（A・『真斎聚方』（197丁・ウ））からの処方群については、

これまでに紹介されているものはない。本稿により、初めて紹介されるものである。

8-1 ○「降気湯」について

《○ 内燥・傷食ハ肺ノ預リ也。》 【全・十五、369頁】

A ・『真斎聚方』（197丁・ウ）

○ 降気湯 真営

枳・青・芍・麦冬（*）

当・橘・芩・梔

甘 少

B ・『真斎設筆』（京大・富士川本、No.359、原文より引用）

- 降気湯 辛味之傷食感氣浮数者主之
 枳・青・芍・麦冬（＊） 各一錢
 当・陳・芩・扨 各八分
 甘 少 水煎

C ・『良中先生自然真當道方』

（杉玄達撰、内藤記念くすり博物館蔵本、No.163、原文より引用）

- 降気湯 辛味傷食脉浮数者主之
 枳実・青皮・芍薬・麦門 各一錢
 当歸・陳皮・黄芩・梔子 各八分
 甘 少 水煎

【考察〈26〉】

Aの「降気湯」の前に「真當」とあるのは、「第二部」の最初の処方と同様である。

Aの薬物には、分量の記載がない。以下の「第二部」の処方には、すべて記載されていない。

8－2 ○「解痰湯」について

《○ 内燥・欬嗽ハ皆肺病也。 》 【全・十五、370頁】

A ・『真齋聚方』（197丁・ウ）

- 解痰湯
 杏・麦冬（＊）・芩・扨・貝
 夏・桔・当・芍・甘
 或加和附 少

B ・『真齋設筆』（京大・富士川本、No.360、原文より引用）

- 解痰湯 痰嗽而感氣剛数者主之
 杏・麦冬（＊）・芩・扨・貝 各一錢半
 夏・桔・当・芍・甘 各一錢二分
 和附 減半 姜・棗ヲ加へ 水煎
 食後ニ服ス

C ・『良中先生自然真當道方』

（杉玄達撰、内藤記念くすり博物館蔵本、No.163、原文より引用）

- 解痰湯 痰嗽脉剛数者主之

杏仁・麦門・黄芩・梔子・貝母 各一錢

半夏・桔梗・当歸・芍薬・甘草

和附

【考察〈27〉】

Bが一番正確である。Cには、分量の記載がないところがある。

8－3 ○「貝桔湯」について

《○ 肺癰ハ・・・》〔全・十五、372頁〕

A ・『真斎聚方』（197丁・ウ）

○ 貝桔湯 治咳唾膿血

貝・葶・枳・杏

桔・薤・芩・芍

甘

B ・『真斎設筆』（京大・富士川本、No.362、原文より引用）

○ 貝桔湯 咳唾膿血感気動数者主之

貝・葶・枳・杏 各一錢

桔・薤・芩・芍 各九分

甘 減半 和附 減半 水煎

C ・『良中先生自然真営道方』

（杉玄達撰、内藤記念くすり博物館蔵本、No.163、原文より引用）

○ 貝桔湯 咳唾膿血脈動数者

貝母・瓜蒌・枳殻・杏仁 各一錢

桔梗・薤苳・黄芩・芍薬 各九分

甘草 和附

【考察〈28〉】

これもBが一番正確である。

8－4 ○「滋肺湯」について

《○ 内燥・淫病ハ、肺ヨリ発ス。 》 [全・十五、373頁]

A ・『真斎聚方』（197丁・ウ）

○ 滋肺湯

芍・当・薬・麦冬（*）・●〔クサカンムリに下〕

白朮（*）・茯苓・干姜

B ・『真斎設筆』（京大・富士川本、No.362、原文より引用）

○ 滋肺湯 内燥淫病感氣剛数者主之

芍・当・薬・麦冬（*）・生●〔クサカンムリに下〕（*）・

白朮（*）・茯苓 各二錢

干姜 炒 五分 和附 微 水煎

C ・『良中先生自然真営道方』

（杉玄遠撰、内藤記念くすり博物館蔵本、No.164、原文より引用）

○ 滋肺湯 内燥淫病脉剛数者

芍薬・当歸・黄栢・麦門・熟地・白朮・茯苓 各二錢

干姜 五分 和附

【考察（29）】

これもBが一番正確である。

8-5 ○「降火止喘湯」について

《○ 内燥・喘息ノ諸病ハ、皆肺病也。 》 [全・十五、374頁]

A ・『真斎聚方』（197丁・ウ）

○ 降〔除〕火止喘湯

芩・梔・麦冬（*）・桑・芍

茯苓・当・杏・貝 甘 或加和附 少

B ・『真斎設筆』（京大・富士川本、No.363、原文より引用）

○ 除火止喘湯 心火勝而肺燥者喘乍発乍止用食則胃口之氣静故暫止

食氣減則胃口之氣發而乃起者主之

芩・梔・麦冬（*）・桑・芍 各一錢

茯苓・当・杏・貝 各八分 甘 少 和附 微 水煎

C ・『良中先生自然真営道方』

(杉玄達撰、内藤記念くすり博物館蔵本、No.164、165、原文より引用)

○ 除火止喘湯 心火勝肺燥者喘乍発乍止為食則胃口氣静故暫止

食氣減胃口氣発乃起者主之

黄芩・梔子・麦門・桑白・芍薬 各一錢

茯苓・当歸・杏仁・貝母 各八分 甘草 和附

【考察〈30〉】

Aの「降火止喘湯」は、「除火止喘湯」が正しい。単純ミスであろう。

ここにおいても、Bの優位は揺るがない。稿本『自然真営道』の復元の際しての『真斎謾筆』の価値は絶大である。

III むすび

ここで、以上の考察を全体的にまとめて、急いで無理に簡単に結論を出す必要はないであろう。なぜなら、本研究は川村真斎の資料と安藤昌益の稿本『自然真営道』との関連性についての、一部分的考察であるからである。

川村真斎の資料と安藤昌益の稿本『自然真営道』との関連性については、さらに追及する課題があると思われるからである。

しかし、「はじめに」でも触れた『真斎謾筆』の内容についての、八重樫新治氏の、「『真斎謾筆』が稿本『自然真営道』を書写したものだ」という説に対して否定した¹⁾、という見解については、私としては、異論を提出せざるを得ないと思う。

本稿の比較研究から、『真斎謾筆』は、稿本『自然真営道』の医学部門のほとんどの処方を含んでいるといえるからである。漢文を書き下しており、かつ真斎自身の感想・見解を述べているので、『真斎謾筆 医方ノ部』としたのであろう。

真斎の追加部分は、おおむね明らかになっており、昌益の語句表現を多少変えたとしても、その基本的な内容は受け継いでいるものと考えてよいのではないだろうか。

『良中先生自然真営道方』には、『真斎謾筆』にない内容があるので、100%のものではないにしても、『真斎謾筆』は稿本『自然真営道』の医学部門の80～90%程度の内容は十分に含んでいるのではないかと私は思っている。

『真斎謾筆』と『良中先生自然真営道方』とを、統合することにより、安藤昌益の稿本『自然真営道』の医学部門については、かなりの程度の復元が可能であると言えると思う。

[2018年4月15日、PHN（思想・人間・自然）、第30号、PHNの会発行]

[2018年4月15日、和田耕作（C）、無断転載厳禁]
